

第 39 回土木計画学研究発表会（春大会）：2009. 6. 13～14（徳島大学）

企画論文部門 セッション討議内容の記録

セッション名： 自転車走行空間・サービスレベル評価	
日付： 6月 14日（日）曜日，セッション時間： 14：20～15：50	
オーガナイザー・司会者名（所属）： 山中英生（徳島大学）	
討議内容	<p>セッション全体： 交通モードに対する意識と道路ダイエットの意味に関する論文と自転車利用空間の評価に関する5本の論文が発表された。自転車空間の評価については、政策方向の示唆、利用者への情報提供、整備区間の選択・優先度、整備施策の選択、整備効果の把握など多様な場面で必要な技術指針であり、今後も研究を進めることが必要と言える。</p>
	<p>(375)オールユーザーのための道路活用の選択肢「道路ダイエット」土井 健司（香川大学） 交通モードに対する意識分析と道路ダイエットの意義について発表された。移動に関する価値観変化を、（安全・安心の重み）×（健康・環境の重み）／（時間・費用の重み）<sup>2</sup>の指標（価値観指標 VI：values indicator）でみると加齢に伴い増加していることが示され、低速でも安全や環境、健康的なモードへのシフトが予想されるとしている。その中で、自転車と他の公共交通モードとの連携が必要となってくるとの指摘があった。</p>
	<p>(376)自転車の快適さマップに係る評価手法の検討 落合 成泰 国際航業(株) 沖縄における観光を目的としたサイクルルートの安全性、快適さを評価し、マップとして情報提供をしている。特に観光客を対象としていることから、市民団体などのマップでは扱われていない勾配について、速度低下が生じる距離を計測して、5%勾配を基準として快適度を評価する方法を提案している点は特徴的である。検証に競技大会参加者の評価を用いているが、競技者・サイクリスト・家族など多様なユーザーが対象になっている。また、休憩施設などの情報追加も検討が必要とのコメントがあった。</p>
	<p>(377)シミュレーションを活用した歩行者自転車混合交通の分離必要度の評価 大脇 鉄也 国土技術政策総合研究所 現在の自転車利用空間である自歩道について、歩行者・自転車の分離必要度を評価して、必要性の高い路線を抽出するという立場から、マイクロシミュレーションを用いて、不快なすれ違い・追い越しが起こる頻度を算定している。こうした考え方を取り入れることで、優先度の考え方を明らかにすることが重要で、都市ごとに整備路線を選択するための指針となるような利用を期待したいとのコメントがあった。</p>
	<p>(378)自転車道及び自転車レーンの適用範囲に関する一考察 諸田 恵士 国土技術政策総合研究所 車道部における自転車と自動車の分離必要度を評価するため、海外基準の分析とともに、我が国における実勢速度を予測して、重傷・死亡事故比率との関係を調べている。第一車線が12時間2000台以上、時速30km以上で分離施策が必要になるが、時速50km未満ではレーン明示の施策の適用が可能との結論を得ている。</p>
	<p>(379)欧州の大都市における自転車走行空間の設計基準とその運用に関する研究 鈴木 美緒 東京工業大学 ドイツの交差点の設計における、実態を詳細に分析し、基準と実際の運用における柔軟性を明らかにしている。</p>
	<p>(380)自転車利用者の満足度を用いた自転車走行環境の評価に関する研究 金利昭 茨城大学 自転車レーンの走行空間の評価のため、走行利用者の満足感調査を用いて評価モデルを提案している。モデルの移転性についての質問がでたが、路面状態や自転車交通量などの考慮ができていないこと、現状評価、改善メニュー選択、改善効果把握などの利用目的の考慮が必要とのコメントがあった。</p>

※ 発表件数に応じて適宜追加してください。